



## 共同研究「アジアのデザインに見る文化の性質」

## 異国文化との交流 ― 長崎からもたらされたもの

研究分担者 神奈川大学国際日本学部准教授 藤澤 茜

筆者は、主に江戸時代の日本文化を専門に研究活動を行なっている。能、歌舞伎などの伝統芸能をはじめ、江戸時代の歌舞伎や浮世絵、小説などがどのように影響し合っていたか、という点に着目して研究を行なっているが、最近とくに興味を持っているのが日本文化と海外文化との交流である。鎖国中でも長崎を通じて様々な情報が伝わり、異国への憧れは多くの作品を生み出した。演劇では、鄭成功の逸話をもとに作劇した近松門左衛門作の『国姓爺合戦』が14ヵ月にも及ぶロングラン公演となる大当たりをとった。浮世絵では舶来の版本や銅版画などから西洋画の技法や図様を取り入れるなど、洋風表現の作品が多く生み出されることとなった。当アジア研究センターの叢書『アジア圏における文化の生成・受容・変容』所収の拙著『浮世絵における西洋文化の受容―詞書に注目して』では、そうした江戸時代の海外文化受容について検討した。

浮世絵が制作された江戸においても、異国文化の集まる長崎に対する深い興味があったことが、葛飾北斎が作画を担当した『狂歌東遊』（浅草菴市人撰、寛政11年(1799)刊行）によりうかがえる（享和2年(1802)には、本書の挿絵のみを抜き出した彩色摺の『画本東都遊』が刊行）。【図1】に描かれるのは、日本橋本石町三丁目の長崎屋である。長崎から江戸の将軍に拝礼するオランダ使節の定宿として知られ、窓の外に集まる人びとの様子から外国への関心の高さがうかがえる。江戸から遠い長崎、そして長崎を通じて知る異国の情報は、版本や浮世絵にも反映されていた。浮世絵の中には、

諸国名所として長崎を取り上げるものもあり、現在でも名所として知られる眼鏡橋（二代歌川広重画『諸国名所百景 肥前長崎目鏡橋』安政6年(1859)刊行）なども描かれている。

筆者は、アジア研究センター研究班「アジアのデザインに見る文化の性質」の研究活動の一環として長崎を訪れる機会を得た。シーボルト記念館や長崎歴史文化博物館をはじめ、大浦天主堂、グラバー邸、唐人屋敷跡、出島跡など江戸時代の面影を残す場所を訪れ、当時の雰囲気にとともに様々な知見を得た。膨大な資料写真の整理を進めている途中であるが、長崎には多くの資料が残されており、江戸時代の異文化研究にとって重要な地であることを再確認した。

長崎ではオランダのみならず中国とも貿易を行っており、鎖国政策が行われるまで中国人は市中で暮らしていたが、密貿易やキリスト教の浸透を防ぐため、元禄2年(1689)に幕府は十善寺郷幕府御薬園（現館内町）に唐人屋敷を設置し、以降は屋敷内のみで生活することが義務付けられた。現在は唐人屋敷跡として、土神堂、天后堂、観音堂（以上は江戸時代に建立されていたが、火災により焼失、現存するものは後の建設）、福建会館（明治30年建立）がある。

残念ながら現在は失われている設立当時の唐人屋敷の様子は、長崎版画に確認することができる。長崎版画は、江戸中期以降、長崎の板元より刊行された木版画で、主に土産物として親しまれた。多くの作品は絵師未詳であるが、唐絵目利（長崎への輸入品のうち



【図1】浅草菴市人撰、葛飾北斎画『狂歌東遊』 蔦屋重三郎板 寛政11年(1799) 出典：国立国会図書館ウェブサイト (<https://dl.ndl.go.jp/pid/2533319/1/37>)



【図2】長崎版画 絵師未詳『唐人屋舗景』 豊嶋屋文治右衛門板 安永9年(1770) 出典：国立国会図書館ウェブサイト (<https://dl.ndl.go.jp/pid/1307088>)

中国絵画などの外国絵画を検閲、鑑定、模写する役人や、医師シーボルトの助手をつとめ出島オランダ商館の出入り絵師となった川原慶賀などの関与があったと推測される。オランダの船や人々の生活、【図2】のような唐人屋敷の様子など、異国文化を伝えるメディアとしての役割も担った。

鳥瞰図的な手法を用いた「唐人屋敷景」【図2】は「出島阿蘭陀屋敷景」と対をなす作品で、詞書には、元禄元年(2年の誤りか)に奉行が十善寺に唐人屋敷を定め、本図刊行の安永9年(1770)まで93年に及ぶ、との記載がある。屋敷内の様子が詳細に示されており、向かって左下には通辞(通訳)部屋や大門、内側に乙名部屋や二の門が描かれている。長崎商人は屋敷入口の二の門まで、それより中に入ることを許されたのは遊女だけとされ、本図にも遊女の姿が認められる点は興味深い。遊女たちの右側の「土地神」と記される建物は、元禄4年(1691)9月に建立された土神堂。また本図右下に大きく描かれる天后堂は、元文元年(1736)に航海の安全を祈願して祀ったという。土神堂や天后堂は現在も再建されたものが残り、本図で目立つよう大きく描かれていることから、重要な建物であったことがうかがえる。天后堂は寛政2年(1790)に改修され、それ以前に描かれた本図は貴重な資料ともいえるだろう。参考までに、調査で撮影した土神堂と天后堂の写真も掲載する。当時の様子を版画で確認し、さらに実際の地をめぐることによってその地の歴史を深く知ることができるという。

また、版画を研究する立場として大変興味深く感じたのは、大浦天主堂キリシタン博物館所蔵の「ド・ロ版画」であった。フランス人のド・ロ神父(1840~1914)がキリスト教の教えを分かりやすく示すために作らせた木版画で、日本人の絵師や彫師が手掛けたというものだ。キリスト教の教義を説明する教理図(5種類)、聖人図(5種類)がある。1875~79年ごろに大浦天主堂の神学校で製作されたといい、版木はすべて大浦天主堂に所蔵されている。同館で行われた初期ド・ロ版画の修復作業(2022年完了)については新聞でも取り上げられるなど注目を集めた。初期版画は持ち運びやすい和風の掛け軸装に仕立てられており、そこには西洋の技法が使われているという。布教に適した版画という形をとりながら、西洋、また中国の聖像の影響を受けて日本化された作風のド・ロ版画は、様々な示唆を与えてくれるものであり、今後も注目していきたい。

今回の調査で得たものは大きく、これからの研究に活かすことが数多くあると考えているが、その一つに、

日本と海外の文化交流の実態を知ることがある。シーボルト記念館を訪れた折、シーボルトが日本の蘭学に与えた影響の大きさに改めて気づき、長崎は海外情報をもたらす地であると同時に、鎖国中の日本の情報を海外へ発信する場であることを実感した。

筆者は昨年末にベルギーのルーベンカトリック大学で日本文化の講演をする機会を得て、ブリュッセル王立美術館、ケルン市立東洋美術館(ドイツ)、ライデンのワールドミュージアム(オランダ)でも浮世絵調査を行うことができた。ワールドミュージアムでは、シーボルトの助手であった川原慶賀の肉筆画のほか、シーボルトが依頼したことで知られる、葛飾北斎とその工房による日本の風俗に関する作品を拝見した。西洋紙に描かれた北斎工房の作品は、陰影表現など洋風の巧みな筆致で、日本の美しい風景や人物が丁寧に表現されており、目を奪われた。当時の文化交流の在り方を、現存する国内外の作品によって確認することが、今後の研究では求められるのではないだろうか。その鍵になるのが、長崎なのだと筆者は考えている。

#### 【参考文献】

- ・板橋区立美術館『長崎版画と異国の面影』図録 2017年
- ・塚原晃「長崎版画としての《姑蘇石湖傲西湖勝景》」『神戸市立博物館研究紀要』第34号 2018年
- ・郭南燕編著『ド・ロ版画の旅 ヨーロッパから上海〜長崎への多文化的融合』創樹社美術出版 2019年



【写真1】土神堂 藤澤撮影



【写真2】天后堂 藤澤撮影